
濱 貴子 (はまたかこ)



【書名】 退屈させずに世界を説明する方法
——バーガー社会学自伝

【著者】 ピーター・バーガー (森下伸也 訳)

【発行】 新曜社

本書は、社会学の眼鏡をかけるとどのように世界がみえるのか、その醍醐味を十二分に堪能できる社会学の巨匠ピーター・バーガーの学問的自伝である。著者は、1929年にオーストリアのウィーンで生まれ、第二次世界大戦後まもなく米国へ移住し、理論社会学、知識社会学、社会科学方法論、宗教社会学、近代化論、第三世界論、資本主義論、政治社会学、家族社会学、神学、あるいはユーモア論など多彩なテーマに取り組み、著した書籍も膨大な数にのぼる。

本書のいたるところでユーモラスかつハッとされるようなエピソードやフレーズを見出すことができ、読者はクスッと笑わずにはいられない。「滑稽は人間の現実を鮮やかに照らし出すことができるし、実際にある種の社会学たりえる (p.332)」との主張のもと、笑い(喜劇)の社会学をめざして60年以上にわたって長く社会学のフィールドで冒険を続けてきた著者の学問的半生を、ぜひ読書を通じて並走し楽しんでもらえればと思う。

なお、著者のほかのおすすめの著作として、『社会学への招待 (水野節夫・村山研一(訳)、新思索社)』、『故郷喪失者たち——近代化と日常意識 (高山真知子ほか(訳)、新曜社)』、『癒しとしての笑い——ピーター・バーガーのユーモア論 (森下伸也(訳)、新曜社)』、『懷疑を讃えて——節度の政治学のために (森下伸也(訳)、新曜社)』を挙げておきたい。また、『現実の社会的構成 (山口節郎(訳)、新曜社)』は著者を一躍学会のスターダムに押し上げ、著者いわく社会学の「マイナー・クラシック」となっている著作である。

【書名】孔子伝

【著者】白川静

【発行】中央公論新社（中公文庫BIBLIO）

『論語』は中学校のどの国語の教科書にもその一節が掲載され、中学校で必ず目にする漢文となっている。弟子たちとの対話のなかから生まれた孔子のことばは格言となり、時代を越えて現代社会を生きる私たちの考え方や行動にも影響を与え続けている。孔子のことばは、どのような時代や社会のなかから生まれ、なぜ現代社会を生きる我々にも意味あるものとして残り続けているのだろうか。

本書は中国文学の碩学白川静先生の「哲人孔子は、どのようにしてその社会に生きたのか。孔子はその力とどのように戦ったのか。そして現実に敗れながら、どうして百世の師となることができたのであろうか。私はそのような孔子を、かきたいと思った。社会と思想と、その人の生きざまと、その姿を具体的にとらえたいと思った。(p.303)」という思いから生み出された著作である。研究者としての先生の立場から、評伝であるとともに精神史・思想史である。中国古代社会における孔子の周辺のことや、思想の系譜についてもきめこまやかに注意深く記述されており、中国古代社会に生きていた具体的人物としての孔子が描き出されている。

白川先生は、平成3〔1991〕年に刊行された文庫版のあとがきで「孔子の時代と、今の時代を考えくらべてみると、人は果たしてどれだけ進歩したのであろうかと思う。たしかに悪智慧は進歩し、殺戮と破壊は、巧妙に、かつ大規模になった。しかしロゴスの世界は、失われてゆくばかりではないか。『孔子伝』は、そのような現代社会への危惧を、私なりの方法で書いてみたいと思ったものであるが、もとよりそれはおそらく私の意識のなかの、希望にすぎなかったかもしれない。(pp.305-306)」と述べておられる。文庫版が出版されて四半世紀後の、さらには初版刊行からおよそ半世紀が経過した現在においても、社会と向き合い生活していくうえで、『孔子伝』は読者に豊かな智慧を授けてくれるに違いない。

なお、儒教を理解するための良質な入門書として『儒教とは何か 増補版(加地伸行(著)、中公新書)』を、また時代と社会がどのような思想やメンタリティを生み出すのかということに関するほかのおすすめの著作として『名誉と順応 サムライ精神の歴史社会学(池上英子(著)、森本醇(訳)、NTT出版)』を挙げておきたい。

【書名】 森

【著者】 野上彌生子

【発行】 新潮社（新潮文庫）

私（たち）は日々、些末な悩みやモヤモヤした気分を抱えながら暮らしているわけであるが、そんなときとときどき、主人公に寄り添いながらバーチャルに物語の世界を生きてみることもある。自分とは違う時代や空間を生きた人々はどのような心情／信条を抱えて生活していたのかということについてフィクションから接近することは、読後、現実世界に戻ってから、それまでとは少し違った気分や姿勢で再び生活できるようになることも（ときには）あり、一服の清涼剤となるものである。

本書『森』は明治生まれの作家・野上彌生子の未完の遺作であり、自叙伝的要素にもとづいて書かれた作品である。主人公の菊池加根の生立ちから青春を過ごした森の女学校時代を軸として、彼女を取り巻く地方と都市をつなぐ家族関係や、江戸から東京へと変容していく都市の生活等も織り込まれつつ重厚に物語られている。『森』の解説を書いた文芸評論家の篠田一士は、「百年を、つねに前向きに生き、感性のういういしい naïveté を失うことなく、一層の輝きを加えながら、知性の研鑽を怠ることなく、超人的な努力をばげみ、その結果が、『迷路』以降の、三つの傑作小説（『迷路』、『秀吉と利休』、『森』：引用者注）に花ひらいたというべきだろう。（p.512）」と評している。読み直すたびにその時々を読み手の状況に応じて違った印象を抱かせる作品である。一読といわず、折に触れて手に取ってもらえればと思う。

著者のほかの著作としては、モダンガールやエンゲルスガールが登場した1920年代後半の東京に生きる若い教養女性を描いた『真知子』もおすすめである。なお、『真知子』は作家・宮本（中條）百合子の『伸子（青空文庫）』に触発されて執筆されたともいわれており、著者の破綻した不幸な結婚生活をもとに描かれた『伸子』も併せて読んでみても興味深いと思う。

また、舞台は18世紀末から19世紀初めのイギリスの田舎町になるが、当時の中産階級の女性の結婚事情と、プライドゆえの誤解と偏見から起こる恋愛模様を描いたジェイン・オースティン『高慢と偏見（阿部知二（訳）、河出文庫）』も、その時代や社会の女性の状況が鋭く丁寧な人物描写とワクワクするストーリー展開とともに描かれており、面白い。ちなみに、『真知子』の物語の骨格は『高慢と偏見』に範を採っている（内容はかなり異なるが）。谷崎潤一郎の『細雪（中公文庫、もしくは新潮文庫）』も1930年代後半から1940年代初頭までの日本（大阪船場・京阪神）の女性の日常生活が結婚事情を軸に精巧に描かれており『高慢と偏見』と比較して読むことができるが、社会や文化の違い等、いろいろと考えさせられる作品である。

【書名】貧乏物語 現代語訳

【著者】河上肇（佐藤優 訳・解説）

【発行】講談社（講談社現代新書）

「強くなければ生きていけない、優しくなければ生きている資格はない」というセリフはハードボイルド小説で著名な作家レイモンド・チャンドラーが作中で生み出した探偵のフィリップ・マーロウに言わしめたものである。私はマーロウにはなれないが、このセリフはお気に入りの言葉の一つである。ただ、この言葉を想起するたびに、いかにしたらそのようになれるのか、また、なれないとしても、いかにしたらそのような存在に近づけるのかと思う（なれないけれども、ならなくていいやとは思えない、ふがいない中途半端）。その方法は、「強さ」や「優しさ」の解釈も含めて、多岐にわたって存在するのであろうが、私は最近本書を読んでいて、著者の河上肇はある面からみたら強くて優しい人のひとりなのではないかと思った（他の面からみたらそうともいえないかもしれないが）。

本書は、戦前の日本を代表する経済学者・河上肇（1879－1946年）が、現在からちょうど100年前の1916年9月から12月にかけて「大阪朝日新聞」に連載されたのち、1917年に出版されたものである。本書のなかで河上は、一生懸命に働いても、人並みの生活を送ることができない貧困を考察の対象とし、いかに多数の人が貧乏をしているか、何ゆえに多数の人が貧乏しているか、どうすれば貧乏を根治できるか、をヨーロッパ留学（1913年から2年間）で得た知見を盛り込みつつ論じている。また、本書を現代語訳した作家の佐藤優による、いま河上肇の『貧乏物語』を読む意味についての解説にも説得力がある。

なお、関連書籍として『日本残酷物語 1～5（宮本常一、山本周五郎、楳西光速、山代巴(著)、平凡社ライブラリー：1…貧しき人々の群れ（掠奪、乞食、売淫）、2…忘れられた土地（離島、山間、蝦夷）、3…鎖国の悲劇（異教徒、身分差別）、4…保障なき社会（没落、離農、棄民）、5…近代の暗黒（女工、タコ部屋、スラム民）』、『社会学ウシジマくん（難波巧士(著)、人文書院）』、『女性ホームレスとして生きる——貧困と排除の社会学——（丸山里美(著)、世界思想社）』を挙げておく。また、逆の視点から、近代日本の実業エリートを研究した『富豪の時代——実業エリートと近代日本——（永谷健(著)、新曜社）』も挙げておきたい。